

日蓮大聖人御書全集

うえのどのごへんじ

上野殿御返事

あい

あお

こと

(藍よりも青き事)

新版
1886
〜
1887

うえのどのごへんじ あい あお こと

上野殿御返事 (藍よりも青き事)

こうあん ねん

弘安2年(79)

がつ にち

1月3日

さい

58歳

なんじょうときみつ

南条時光

もちいくじゆうまい やまのいもごほん

おんつか

しょうがつみつか

餅九十枚・薯蕷五本、わざと御使いをもつて、正月三日

羊 とき

するがのくにふじぐんうえののごう

こうしゅうはきいのごうみ

ひつじの時に、駿河国富士郡上野郷より甲州波木井郷身

のぶさん

洞

送

給

そうろう

延山のほらへおくりたびて候。

そ かいへん

き たから

さんちゆう

しお

たから

かんぱつ

夫れ、海辺には木を財とし、山中には塩を財とす。早魃

みず

財

あんちゆう

ともしび

たから

によん

には水をたからとし、闇中には灯を財とす。女人は

夫

たから

夫

によん

命

おう

たみ

おとこを財とし、おとこは女人をいのちとす。王は民を

親

たみ

じき

てん

おやとし、民は食を天とす。

りようさんねん

にほんこく

うちだいえきお

ひとはんぶん

減

この両三年は、日本国の内大疫起こつて、人半分げんじ

そろううえ

こそぞ

しちがつ

おお

飢 渴

里 市

て候上、去年の七月より大いなるけかちにて、さといちの

無 縁

者

さんちゆう

そうとう

いのちそん

難

むえんのもと山中の僧等は命存しがたし。

うえ

にちれん

ほけきようひぼう

くに

う

いおんのうぶつ

その上、日蓮は法華経誹謗の国に生まれて、威音王仏の

まつぼう

ふきようぼさつ

かんぎぞうやくぶつ

まつ

かくとく

末法の不軽菩薩のごとし。はたまた、歓喜増益仏の末の覚徳

びく

おう

憎

たみ

怨

ころも

薄

じき

比丘のごとし。王もにくみ、民もあだむ。衣もうすく、食

乏

ほい

錦

くさば

かんろ

おも

もとぼし。布衣はにしきのごとし。草葉をば甘露と思う。

うえ

こそぞ

じゆういちがつ

ゆき積

やまざとみち絶

その上、去年の十一月より雪つもりて山里路たえぬ。

としかえ

とり

こえ

訪

ひと

とも

年返れども、鳥の声ならではおとずるる人なし、友にあ

誰と

こころ 細

過

そうろう

らずばたれか問うべきと心ぼそくて過ごし候ところ

がんざん

うち

むしもちくじゆうまい

まんげつ

しんちゆう

明

元三の内に十字九十枚、満月のごとし。心中もあきらかに、

しょうじ

闇

晴

生死のやみもはれぬべし。あわれなり、あわれなり。

故上野殿

色

男

ひと

もう

こうえのどのをこそ、いろあるおとこと人は申せしに、

みこ

紅

濃

由

伝

たま

その御子なれば、くれないのこきよしをつたえ給えるか。

藍

青

みず

冷

こおり

あいよりもあおく、水よりもつめたき氷かなと、ありが

きようきようきんげん

たし、ありがたし。恐々謹言。

しょうがつみつか

正月三日

にちれん

かおう

日蓮

花押

うえのどのごへんじ

上野殿御返事